

## I. はじめに

平成 27 年 3 月の特別支援学校(知的障害)高等部の卒業生の就職率は、31.5%<sup>10)</sup>である。平成 25 年 4 月から法定雇用率が引き上げられたことにより、今後さらなる一般就労の増加が期待されるものの、平成 27 年版障害者白書<sup>11)</sup>によれば、法定雇用率を達成した企業の割合は、44.7%と半数に満たない状況である。このような現状の中、卒業後を見据え、社会的及び職業的自立の促進を踏まえた教育的対応の検討が大きな課題となっている。菊地<sup>6)</sup>は、生徒本人にとっての「なぜ」「なんのための」をふまえた指導の充実を図る必要性があり、生徒が他者から認められることによる自己肯定感の向上や物事にチャレンジする経験が重要であるとし、支援する側にはキャリア発達を支援するという視点が求められるとしている。

明官<sup>8)</sup>は、技能検定の取組について、生徒が自分の存在価値を経験し、積極的にかかわる意欲や態度を育てることができること、また、生徒に対し発達的に働きかける教育活動であることを指摘している。菊地<sup>5)</sup>は、技能検定の目的を「生徒の技能を高めるためだけでなく、学びがいを高め、チャレンジする意欲を育成すること」と示している。東京都で平成 19 年度に始まった特別支援学校の生徒を対象とした技能検定の導入の経緯について、明官<sup>8)</sup>は、産業構造の変化から、生徒の進路先がサービス業に移行するようになり、特別支援学校において清掃作業の取り組みが始まり、ビルメンテナンス協会に協力を依頼し、教師対象の研修会や講師として生徒への直接指導をするとともに、教科学習で行う期末テストのように生徒のできることを確認する作業検定として導入したことを報告している。なお、これまで、アビリンピックとして、全国障害者技能競技大会や各都道府県の地方大会が開催されてきているが、参加人数が限られていることもあり、特別支援学校の生徒が多数参加することが難しい状況である。

東京都では清掃技能検定の他に、パソコン入力技能検定や喫茶接客サービス検定<sup>16)</sup>が実施され、広島県では労働行政、福祉行政、学識経験者、特別支援学校長及び教育行政から構成される特別支援学校認定資格研究協議会を立ち上げ、清掃、接客、ワープロ、流通・物流(運搬・陳列と商品化)、食品加工の 5 分野の検定が実施<sup>13)</sup>されている。運搬・陳列の内容として、三面カートからの荷下ろし、台車への荷積み、商品陳列・点検、商品化については、商品の袋詰め、ラベル貼り、コンテナ収納<sup>2)</sup>が実施されている。また、介護の技能検定の内容として、ベッドのシーツ類の回収、回収かごの運搬等<sup>14)</sup>が行われている。これらの技能検定は、すべてが職業技能に関するものであり、知的障害ある生徒を対象としたものがほとんどである。

東京都教育委員会<sup>15)</sup>によれば、技能検定は、生徒にとって、合格することで自信が付き、次の目標が明確になり、意欲が向上する、教師においては、次の目標に向けて指導の組立や指導方法の充実・改善がしやすくなる、保護者にとっては、学校と連携して家庭での支援がしやすくなる、就労先にとっては、生徒の実力を客観的に把握でき、適した業務の工夫が容易になると報告している。また、文部科学省<sup>9)</sup>は、平成 26 年度のキャリア教育・就労支援等の充実事業において、技能検定について、「生徒が目的意

識を持って学習意欲を高めたり、就職の際に学習の成果を証明したりする上で効果的である」とし、事業内容の取組例として挙げており、今後、技能検定を実施する自治体は増加すると予想される。

そこで、実際に技能検定に関する指導をしている教師を対象とした質問紙調査を実施することにより、技能検定の指導に関する成果や課題を明らかにすることとした。

## II. 目的

特別支援学校(知的障害)高等部における技能検定に関する指導の成果と課題を明らかにし、技能検定における指導の在り方について検討する。

## III. 方法

### 1. 調査手続き

特別支援学校における技能検定は、学校単独で実施しているケースもあるが、本研究では都道府県ごとに実施しているものを対象とした。2014年5月に、「特別支援」と「技能検定」をキーワードとし、実施している都道府県をWeb検索したところ、福島県、新潟県、千葉県、東京都、三重県、徳島県、愛媛県、広島県、大分県、宮崎県の10都県が確認できた。そこで、郵送による質問紙調査を実施し、上記の10都県の高等部を設置している特別支援学校(知的障害)114校(分校分教室を含む)において、技能検定に関する指導をしたことのある高等部の教師に依頼した。結果、81校(回収率71.1%)から回収した310名のうち複数の項目で未記入があった2名を除いた308名(普通科所属240名、専門学科所属68名)を分析対象とした。普通科と専門学科では在籍する生徒の実態や教育課程が異なるため、普通科と専門学科に分けて集計した。調査時期は2014年9月上旬から10月上旬であった。

### 2. 調査項目作成と調査内容

技能検定の種目の選択肢については、明官<sup>8)</sup>より「清掃」、東京都教育委員会<sup>16)</sup>と坂本<sup>13)</sup>より「ワープロ・パソコンデータ入力」、広島県教育委員会<sup>3)</sup>と愛媛県教育委員会特別支援教育課<sup>1)</sup>より「商品化」、広島県教育委員会<sup>2)</sup>より「運搬・陳列」、広島県教育委員会<sup>2)</sup>より「食品加工・調理」、徳島県教育委員会特別支援教育課<sup>14)</sup>より「介護」を設定し、「その他」も付け加えた。技能検定に関する指導の成果と課題については、技能検定の受検をした生徒を指導したことのある特別支援学校高等部の教師複数名を対象にして、技能検定に関する指導によって、生徒はどのように変容したか、指導面でどのような成果があったか、また技能検定に関する指導の課題は何かを聞き取った。得られた回答を基に、技能検定を受検した生徒に関する成果、技能検定に関する指導の成果と課題の項目の選択肢を作成した。次に予備調査として、技能検定に関する指導をしたことのある者を含む特別支援学校(知的障害)高等部教師5名に依頼し、調査内容や選択肢等の妥当性や適正さを尋ねた。指摘されたことについて必要な加筆と修正を行い、以下の調査内容を本調査で用いた。また、複数回答可とした。

①指導した技能検定の種目②受検した生徒の変容から見られる技能検定の成果③技能検定の実施による指導上の成果④技能検定の実施における課題

#### IV. 結果

##### 1. 指導した技能検定の種目

表1に指導した技能検定の7種目の結果を示した。両学科ともに最も高い割合を示したのは、「清掃」であり、次いで「接客(喫茶接客サービス)」、「ワープロ・パソコンデータ入力」、「商品化」等が続いた。

表1 指導した技能検定の種目(複数回答)

	普通科 N=240	専門学科 N=68
清掃	208(86.7)	47(69.1)
接客(喫茶接客サービス)	41(17.1)	18(26.5)
ワープロ・パソコンデータ入力	28(11.7)	11(16.2)
商品化	11(4.6)	7(10.3)
運搬・陳列	8(3.3)	5(7.4)
食品加工・調理	7(2.9)	4(5.9)
介護	3(1.3)	5(7.4)
その他(作業製品)	2(0.8)	0(0.0)

( )内は当該学科内の%

##### 2. 受検した生徒の変容から見られる技能検定の成果

技能検定を受検したことによる生徒の変容や成果についての結果を表2に示した。最も割合が高かったのは、両学科ともに「生徒の自信や達成感につながった」であり、次いで「生徒が資格取得という明確な目標をもった」であった。「生徒自身が現状の技術力を客観的に理解できるようになった」では、普通学科が約45%であったが、専門学科は約60%であった。また、割合はわずかであるが、「資格取得が就労に直結した(例:清掃の資格取得で清掃会社に就職)」も回答されていた。

##### 3. 技能検定の実施による指導上の成果

技能検定に関する指導の成果についての結果は、表3に示した。最も割合が高かったのは、普通科、専門学科ともに「具体的な指導内容を基に指導できるようになった」であり、次いで「評価をする際、生徒の到達度や課題が明確になった」が続いた。また「生徒の作業能力について、企業や関係機関に伝えやすくなった」や「関係機関と連携するようになった」、「進路について保護者の意識が向上し、家庭との連携が深まった」等の関係機関や家庭との連携に関するものもわずかであるが、回答されていた。

表2 受検した生徒の変容から見られる技能検定の成果(複数回答)

	普通科 N=240	専門学科 N=68
生徒の自信や達成感につながった	214(89.2)	57(83.8)
生徒が資格取得という明確な目標をもった	161(67.1)	44(64.7)
返事や報告、挨拶等の態度が向上した	113(47.1)	31(45.6)
生徒自身が現状の技術力を客観的に理解できるようになった	109(45.4)	41(60.3)
生徒同士のかかわり合いや励まし合いが増えた	72(30.0)	24(35.3)
生徒の就労への意欲が向上した	64(26.7)	21(30.9)
家庭でも手伝いをするようになった	23(9.6)	9(13.2)
資格取得が就労に直結した(例:清掃の資格取得で清掃会社に就職)	15(6.3)	3(4.4)

( )内は当該学科内の%

表3 技能検定の実施による指導上の成果(複数回答)

	普通科 N=240	専門学科 N=68
具体的な指導内容を基に指導できるようになった	189(78.8)	51(75.0)
評価をする際、生徒の到達度や課題が明確になった	141(58.8)	32(47.1)
明確な目標を設定するようになった	118(49.2)	28(41.2)
日々の学習の成果を発表する場が設定されるようになった	99(41.3)	25(36.8)
校内で指導上の留意点を共有し、指導方法や言葉かけを統一するようになった	81(33.8)	29(42.6)
生徒の作業能力について、企業や関係機関に伝えやすくなった	52(21.7)	15(22.1)
関係機関と連携するようになった	29(12.1)	8(11.8)
進路について保護者の意識が向上し、家庭との連携が深まった	19(7.9)	3(4.4)

( )内は当該学科内の%

#### 4. 技能検定の実施における課題

技能検定の実施における課題を表4に示した。最も割合の高かったのは、両学科ともに「審査員によって差が出ないよう基準を厳格にする必要がある」であり、次いで「技能面だけでなく、生徒の気持ちや働く意欲など心理面に重きを置いて指導する必要がある」が続いた。「校内で技能検定の研修体制が整っていない」は、普通科が約33%であったが、専門学科では約19%であった。「障害の程度が中度・重度の生徒の受検について検討する必要がある」は普通科が約31%であったが、専門学科では約16%であった。

表4 技能検定の実施における課題(複数回答)

	普通科 N=240	専門学科 N=68
審査員によって差が出ないよう基準を厳格にする必要がある	110(45.8)	33(48.5)
技能面だけでなく、生徒の気持ちや働く意欲など心理面に重きを置いて指導する必要がある	103(42.9)	32(47.1)
校内で技能検定の研修体制が整っていない	78(32.5)	13(19.1)
障害の状態がいわゆる中度・重度の生徒の受検について検討する必要がある	75(31.2)	11(16.2)
校内で技能検定の目的や意義が十分に理解されていない	62(25.8)	16(23.5)
技能検定受検のために授業をするという傾向が出てきた	59(24.6)	13(19.1)

( )内は当該学科内の%

## V. 考察

### 1. 指導した技能検定の種目

両学科とも「清掃」が最も高い割合を示したが、渡辺<sup>18)</sup>は、高等特別支援学校(知的障害)では、専門教科「流通・サービス」において、清掃の学習活動の実施率が高く、多くの学校で本格的な清掃業務が指導されていると報告している。そのため、すでに多くの学校が、学習活動として清掃を指導しており、自治体としても技能検定の種目として設定したと考えられる。東京都立南大沢学園養護学校<sup>17)</sup>の普通科職業学習類型では、清掃の特性を次のように指摘している。どこでも必要とされる活動であり、清掃業への就労につなげることができる。また、様々な工程があり、生徒の実態に応じた分担ができ、自信や責任感を育成できる。さらに、校外に出て働く経験ができ、作業の結果を第三者も評価が可能であり、生徒の自己肯定感を高めることや次の取組への意欲につなげることができる。これらの特性は、教育的にも意義が大きく、種目として設定され、指導した学校や教師が多かったと考えられる。

技能検定の種目は、生徒の興味や関心、特性に応じた種目の設定や進路先の開拓ということから、今後、種目数の増加も予想される。また、就職率が増加しつつある有望な職種を技能検定の種目に設定し、重点的に指導していくことも考えられる。そのため、例えば清掃検定ならば、清掃のエキスパートの育成や清掃会社への就労のみを目的に捉えるということが危惧されるが、生徒が技能検定の学習過程において、職業スキルの向上だけでなく、働く楽しさや喜びを実感し、働く意欲やチャレンジする姿勢を身に付けるという技能検定の目的は、どの種目においてもおさえておく必要があるだろう。

## 2. 受検した生徒の変容から見られる技能検定の成果

両学科で割合の高かった「生徒の自信や達成感につながった」「生徒が資格取得という明確な目標をもった」について、東京都教育委員会<sup>15)</sup>によれば「生徒にとって合格することで自信が付き、次の目標が明確になって意欲が向上する」との効果があると示唆しているが、本研究の結果からも同様の示唆を得られた。技能検定に取り組んだことによる級の取得や周囲の人からの称賛等、実際的かつ具体的な体験をとおして、生徒の自己肯定感が高まり、物事にチャレンジする経験<sup>6)</sup>につながっていることがうかがわれる。また「返事や報告、挨拶等の態度が向上した」や「生徒自身が現状の技術力を客観的に理解できるようになった」については、両学科で約45%から約60%程度の回答があったが、背景には技能検定に関するマニュアルや級を取得する評価基準が設定されている<sup>13)</sup>ことが考えられる。どの種目のマニュアルにも、活動する前後の挨拶、返事、報告が決められていた<sup>13)</sup>り、現時点での身につけたスキルと過去の状況を比較しやすかったりすることが考えられる。「生徒自身が現状の技術力を客観的に理解できるようになった」について、専門学科は約60%であったが、普通科は約45%にとどまっており、学科による生徒の実態の違いも推測されるが、今後、詳細に検討する必要がある。「資格取得が就労に直結した」の割合はわずかに留まったが、技能検定の目的が就労に直接結びつくことをねらいとしたものではないことや技能検定に取り組んで間もない自治体が多く、企業等への理解啓発が十分に進んでいないことも背景として考えられる。

## 3. 技能検定の実施による指導上の成果

両学科で割合の高かった「具体的な指導内容を基に指導できるようになった」「評価をする際、生徒の到達度や課題が明確になった」「明確な目標を設定するようになった」について、坂本<sup>13)</sup>は、指導マニュアルによって指導内容や指導方法が統一されていることや評価表には具体的な工程が示されているため、一人一人の達成度や課題が明確になることを指摘しているが、本研究の結果においてもマニュアルや評価基準が設定されていることが関連していると考えられる。作業内容や手順のマニュアルに基づいて指導内容を設定して授業を構成したり、生徒の現時点での段階に即して目標の設定をしたりしていることが推察される。また「校内で指導上の留意点を共有し、指導方法や言葉がけを統一するようになった」も具体的なマニュアルや評価基準があることと関連していると考えられ、複数の教師が関わっても、統一した留意点があることによって、指導や言葉がけにばらつきが出にくいことが考えられる。しかしながら、安易にマニュアルや評価基準だけを頼りに授業をすることは、避けなければならない。柏木<sup>3)</sup>は、あくまで検定は作業種目のスキルの習熟度を見るためのものであり、指導マニュアルは正しいスキルを身につけるために、必要なスキルを分析したものであると指摘しており、技能検定の趣旨である目標をもってチャレンジし、生徒自身の自分の育ちを実感することや自己肯定感を高めることをねらった取組であることを十分理解して指導する必要がある。授業実践する上で、指導目標や内容だけでなく、学習評価においても妥当性を高める必要がある。技能検定に関する指導においては、作業手順の

理解や技術的な面に重きが置かれがちであるが、生徒の学習状況の評価を的確にとらえる必要があり、例えば、「関心・意欲・態度」や「思考・判断・表現」等の観点別学習状況の評価を実施することが重要である。生徒の活動への意欲の視点、生徒が自分なりに活動において工夫している様子や活動の振り返りの場面等の視点によって、生徒の発達を多面的かつ具体的に把握することができると考えられる。

#### 4. 技能検定の実施における課題

両学科ともに最も割合が高い「審査員によって差が出ないよう基準を厳格にする必要がある」については、検定であるため、公平公正さが求められるが、そうっていない現状がうかがわれる。審査員の力量によるものか、評価基準の曖昧さによるものかは、この質問項目からは、明らかにできなかったが、生徒のこれまでの取組を評価するためにも明確な審査が求められる。基準の厳格性や「校内で技能検定の研修体制が整っていない」は、技能検定における運営面の課題を示している。自治体や学校によっては、技能検定に取り組み始めて間もないところが多いことも予想され、今後、教育委員会や運営を担う各学校の代表、関係機関による検討会等で整備していくことが必要である。次に割合が高かった「技能面だけでなく、生徒の気持ちや働く意欲など心理面に重きを置いて指導する必要がある」については、教師の指導面の課題を示していると考えられるが、指導の前提となる技能検定の目的や意義を十分に共通理解する必要があると考えられる。「障害の状態がいわゆる中度・重度の生徒の受検について検討する必要がある」について、専門学科より普通科の割合が高かったが、技能検定は障害の状態がいわゆる軽度とされる生徒が多数受検している可能性があるものの、障害の状態にかかわらず個々に応じた指導を検討していく必要がある。現在、使用しているマニュアルが簡易化されれば、障害の状態がいわゆる中度や重度とされる生徒にも活用することが可能であるだろう。また、高等部の生徒だけではなく作業手順を明確にすることによって、中学部の生徒も意欲的に清掃作業に取り組んでいることを加藤<sup>4)</sup>は報告している。障害の状態の軽重や学部の違いにこだわらず、教師は自己肯定感の向上や学習意欲の育成をふまえた授業の充実を図ることが重要である。尾崎<sup>12)</sup>は日常行っている授業における児童生徒の学びの充実に向けた支援とキャリア発達支援の具体化が求められるとし、菊地<sup>7)</sup>は、授業において、児童生徒が活動経験をとおして、自己実現に向けた変化に結びつけることができるように環境を整え、支援の工夫を図ることが重要であると指摘している。

今後、技能検定に関する指導の効果や個々に応じたきめ細かい指導を検討するために、実践を通じた研究知見を蓄積する必要があるだろう。

## 文献

- 1) 愛媛県教育委員会特別支援教育課(2016) 平成 28 年度笑顔のえひめ特別支援学校技能検定.  
<http://ehime-c.esnet.ed.jp/shougaiji/index6gino.html> (2016 年 10 月 5 日閲覧)
- 2) 広島県教育委員会(2016) 特別支援学校技能検定の取組.  
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/07challenge-ginoukenteitorikumi-index.html>  
(2016 年 10 月 5 日閲覧)
- 3) 柏木伸二(2011) 東京都立青鳥特別支援学校の取組. 国立特別支援教育総合研究所(編), 特別支援教育  
充実のためのキャリア教育ガイドブック, 169-178.
- 4) 加藤公史(2012) 生活意欲や働く意欲を育て、卒業後の「働く生活」を実現するための実践. 菊地一文  
(編), 特別支援教育充実のためのキャリア教育ケースブック, ジアース教育新社, 73-81.
- 5) 菊地一文(2013a) 保護者との連携・協働および教育行政による推進. 菊地一文(編), 実践キャリア教育  
の教科書. 学研教育出版, 71-76.
- 6) 菊地一文(2013b) 職業教育で終わらないキャリア教育. 菊地一文(編), 実践キャリア教育の教科書. 学  
研教育出版, 84-86.
- 7) 菊地一文(2013c) 現在と将来を「つなぐ」視点で「学び」の意味を問い直す. 菊地一文(編), 実践キャ  
リア教育の教科書. 学研教育出版, 106-115.
- 8) 明官茂(2010) 子どもの力を見えるかたちに. 実践障害  
児教育, 448, 3-4.
- 9) 文部科学省(2014) キャリア教育・就労支援等の充実事業.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/006/h26/1350407.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/h26/1350407.htm)  
(2016 年 10 月 5 日閲覧)
- 10) 文部科学省(2016) 特別支援教育資料(平成 27 年度).
- 11) 内閣府(2015) 平成 27 年版障害者白書.
- 12) 尾崎祐三(2014) 共生社会の形成を目指すうえでキャリア発達支援が目指すもの. 発達障害研  
究, 36(3), 224-232.
- 13) 坂本幸司(2013) 生徒のチャレンジする気持ちを支援する特別支援学校技能検定. 特別支援教育研  
究, 673, 25-27.
- 14) 徳島県教育委員会特別支援教育課(2016) とくしま特別支援学校技能検定.  
<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2014100300425/files/ginoukentei01.pdf>  
(2016 年 10 月 5 日閲覧)
- 15) 東京都教育委員会(2009) 職業教育の充実を目指して-東京都特別支援学校清掃技能検定テキスト-.
- 16) 東京都教育委員会(2011) 平成 22 年度特別支援学校におけるキャリア教育推進事業知的障害特別支援  
学校キャリア教育推進委員会報告書 夢と可能性を実現につなげるキャリア教育-パソコン入力技  
能検定マニュアル・喫茶接客サービス指導マニュアル.
- 17) 東京都立南大沢学園養護学校(2008) ビルクリーニング作業の事例 1. 全国特別支援学校知的障害教育  
校長会キャリアトレーニング編集委員会(編), キャリアトレーニング事例集 I ビルクリーニング編,  
ジアース教育新社, 9-65.
- 18) 渡辺明広(2009) 知的障害特別支援学校(特別支援学校高等部)における「流通・サービス」の実施状  
況についての調査研究. 特殊教育学研究, 47(1), 23-35.